

中 村 遺 跡

—鉄塔建替工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2 0 0 8

安中市埋蔵文化財発掘調査団

中 村 遺 跡

—鉄塔建替工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2008

安中市埋蔵文化財発掘調査団

序

旧安中市と旧松井田町は、「平成の大合併」により、平成18年3月、新しい「安中市」が誕生しました。群馬県と長野県との県境には、碓氷峠があり、近世では中山道、明治以降では鉄道施設、古代では入山峠に東山道が通過する交通の要衝として知られています。郷原地区は、旧松井田町との境にあり、碓氷川と九十九川に挟まれた場所で、中山道が通過し、現在では、国道18号線が通る交通の要衝として古くから栄えて参りました。

このたび、東京電力株式会社が計画する磯部・郷原地区に所在する鉄塔の建て替えを行うにあたって、中村遺跡での事前の発掘調査を行うことになりました。本報告書はその成果をまとめたもので、本報告が、学術分野に寄与するだけではなく、地域を学ぶ郷土資料として活用されることを願ってやみません。

最後に、発掘調査にご協力いただいた東京電力株式会社をはじめとする関係者の皆様、発掘調査に従事していただいた方々には感謝申し上げる次第です。

平成20年3月

安中市埋蔵文化財発掘調査団
団長 中澤 四郎

例　　言

- 1 本書は東京電力株式会社（群馬支店）が計画した九十九線№2～№9鉄塔建て替え工事に伴う№6鉄塔に係る中村遺跡（略称C－23）の発掘調査報告書である。
- 2 中村遺跡は安中市郷原字中村707－1に所在する。
- 3 確認調査については国庫補助金・県費補助金により、平成19年度に安中市教育委員会が実施し、本調査及び遺物整理は原因者負担により、平成19年度に安中市教育委員会が組織する安中市埋蔵文化財発掘調査団（団長中澤四郎）が委託を受けて実施した。
- 4 確認調査及び発掘調査、遺物整理は井上慎也（学習の森文化財係主任・文化財保護主事）が担当した。
- 5 確認調査は平成19年6月15日及び19日に実施した。発掘調査は平成19年9月26日より10月4日までの間、実施した。資料整理及び報告書作成は調査終了後より平成20年3月31日までの間、断続的に実施した。
- 6 本書の編集・執筆は井上が行った。資料整理及び遺構図、遺物実測・トレース、各種図版の作成は、井上・吉澤栄子・大月圭子が行った。
- 7 遺構・遺物の写真撮影は井上が行った。
- 8 発掘調査の記録、出土遺物は安中市教育委員会が保管している。
- 9 発掘調査及び遺物整理の期間中次の方々にご指導、ご協力をいただいた（敬称略）。
石田　真　山口逸弘

10 調査組織（平成19年度）

安中市埋蔵文化財発掘調査団（事務局　安中市教育委員会）

団長（教育長）　中澤四郎

副団長（教育部長）　佐藤伸太郎

事務局長（学習の森所長）　小島成公

事務局次長（文化財係長）　藤巻正勝（事務総括）

経理担当（主査）　蜂須賀まゆみ

調査員（主査）　壁　伸明

調査員（主査）　千田茂雄

調査員（主査）　深町　真

調査員（主任）　井上慎也（調査担当）

調査参加者

大月圭子　清水洋一　須藤　豊　高澤はつ江　遠間宰吉　広瀬良平　丸岡民子　吉澤栄子

凡　例

- 1 遺構の実測図は1/80を基本とした。
- 2 遺構図中の北マークは磁北である。なお、座標は世界測地系を使用した。
本文中で使用した地図は、国土地理院発行の地形図「富岡」(1/50,000)、安中市都市計画地図(1/2,500)である。
- 3 遺物実測図の縮尺は次のとおりである。
土器：1/4 石器：2/3 1/4
- 4 土層説明中での記号、略称は次のとおりである。
土層名称及び量の基準：「新版標準色帖」による。
色調<：より明るい方向を示す（暗<明）
しまり、粘性 ○：あり ○：ややあり △：あまりない ×：なし
混入物の量 ○：大量（30～50%） ○：多量（15～25%） △：少量（5～10%）
※：若干（1～3%）
混入物 R P：ローム粒子（溶け込んだ状態） R B：ロームブロック（固まりの状態）
Y P：板鼻黄色軽石

6 遺物重量分布及び 遺物分布図マーク		土器	10g	100g	1,000g	石器	1個	5個	種	1個	10個
文様	●	●	●			石器A類	■	■			
圓文	○	○	○			石器B類	●	●			
無文	▲	▲	▲			石器C類	△	△			
不明	△	△	△			石器D類	○	○			
底部	□	□	□			石器E類	+	+			

目　次

序

例言

凡例・目次

I 調査に至る経過	1	第1図 調査位置と確認調査	2
II 調査の方法と経過	1	第2図 調査区位置図	3
III 遺跡の地理的・歴史的環境	4	第3図 周辺遺跡分布図	5
IV 遺構と遺物	6	第4図 中村遺跡 全体図	7
1 繩文時代の遺構と遺物	6	第5図 遺物分布図	8
2 中世の遺構	11	第6図 繩文遺物実測図（1）	9
V 成果と問題点	11	第7図 繩文遺物実測図（2）	10
1 繩文時代について	11	第8図 菅沼城と中世関連遺構群	12
2 中世について	11		

I 調査に至る経過

平成19年5月16日、東京電力株式会社から九十九線No 2～No 9鉄塔建替工事予定地における埋蔵文化財の状況について照会があった。該当場所の一部（新No 3、6、8）は、周知の埋蔵文化財包蔵地内（市No382、314、317）にあり、開発については、市教育委員会と協議が必要であることを伝えた。同年6月4日、東京電力から市教育委員会へ埋蔵文化財確認調査の依頼があり、工事に先立ち埋蔵文化財の状況を把握するための確認調査を実施することになった。同年6月15・19日に市教育委員会で確認調査を実施した。調査の結果、鉄塔新No 6 予定地で縄文時代の遺物包含層及び中世の遺構が確認され、工事区域内に埋蔵文化財が存在し、他の2地点については、遺構・遺物は確認されなかったため埋蔵文化財が存在する可能性が低いことが判明した。同年6月20日、東京電力株式会社へ確認調査の結果について伝え、他の2地点を除く鉄塔新No 6における今後の埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行った。しかし、既存の鉄塔建替のため工事計画場所を変更することは困難な状況であるとの事情から、工事に先立ち発掘調査を実施し、記録保存の措置を講じることになった。同年6月21日、必要書類（法93条届出）が提出され、東京電力株式会社と市教育委員会が組織する安中市埋蔵文化財発掘調査団の間で、埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し、同年9月26日から調査を開始した。

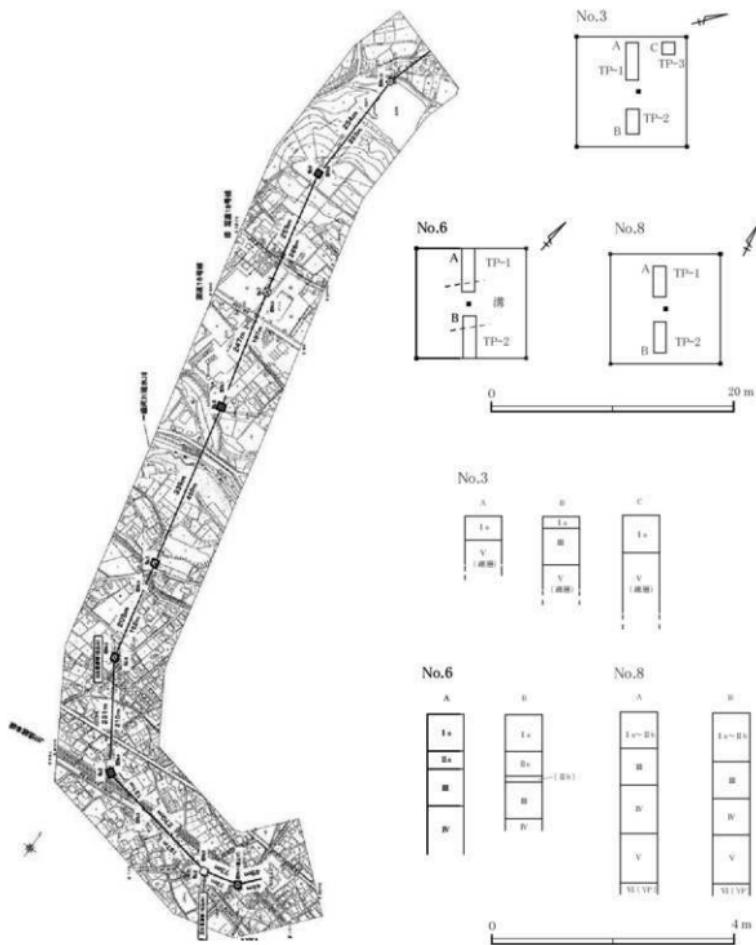
II 調査の方法と経過

確認調査は、平成19年6月15日と19日に実施した。鉄塔部分全域を対象にして、幅1mのトレンチを中心部に設定し人力で遺構確認面まで掘削した。調査の結果、鉄塔新No 6で縄文時代の遺物包含層及び中世の溝が存在することから、この部分を本調査の対象とした。

本調査は、平成19年9月26日から10月4日までの間実施した。調査区は、遺跡が影響を被る部分を最小限とした。発掘調査は、まず、バックホーで表土を掘削し、ジョレンを使用して人力で遺構確認を行い、遺物包含層及び遺構の精査を行った。精査した遺構については、写真撮影、測量（土層及び平面）を行い、調査終了後、バックホーによる埋め戻しを行った。

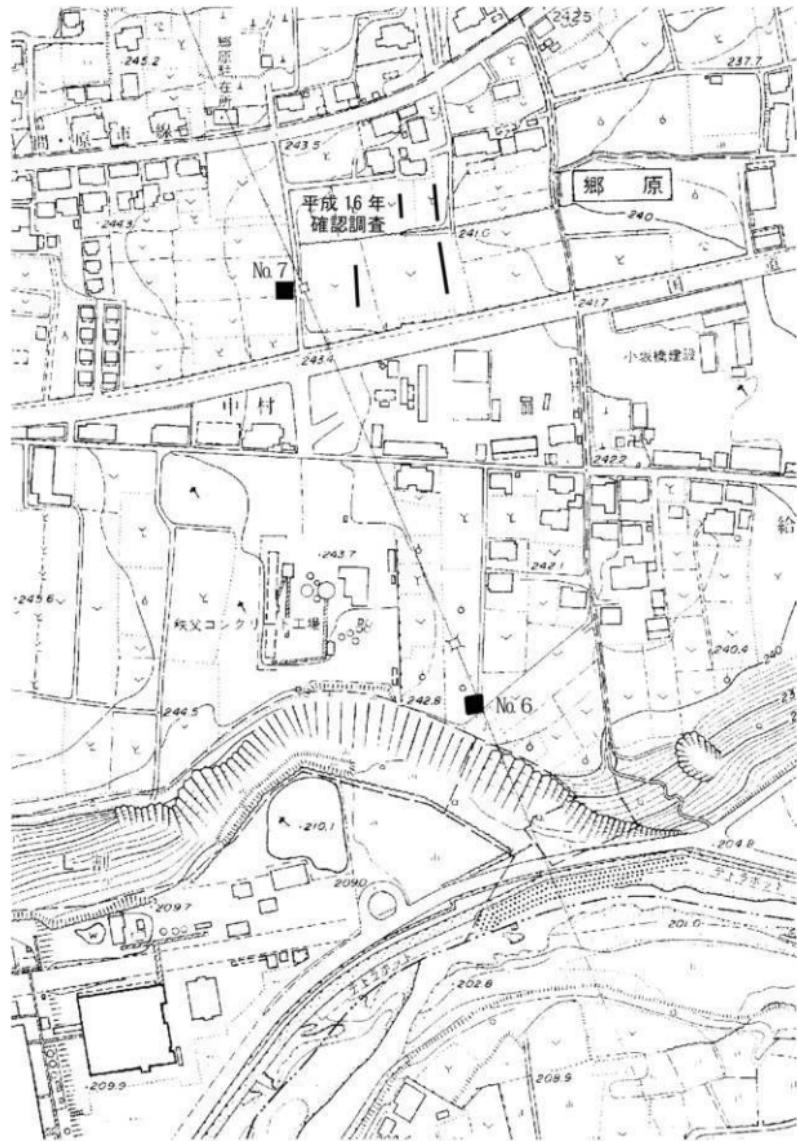
調査範囲が狭いことによりグリッドは設定せず、鉄塔範囲を示した四隅にある杭を基準とした。この杭には、世界測地系の座標値が取り付けてある。調査区は、A区とB区とし、それぞれ調査区北から2m間隔で1～4区に区分けした。遺構実測は、平板測量により1/40で作成し、遺構の高さを記録した。土層断面図は、メッシュ線を基準とする測量により1/20で作成した。出土した遺物は、層位及び区毎に取り上げて記録した。

資料整理及び報告書作成は、発掘調査終了後、平成20年3月31日までの間、断続的に実施した。資料整理は、遺物の洗浄・注記・接合・分類及び遺物台帳作成等の遺物整理、図面の修正・整理、各種台帳の整理、写真整理を中心に行った。報告書作成及び編集は、平成19年11月より開始し、パソコン等のデジタル機器を使用して、図面トレース、データ集計、遺物実測・トレース、デジタルカメラによる遺物写真撮影、写真図版作成等を行った。



調査名	色調	土性	類型	測定	面積割合	備考			
				R.P.	R.R.	V.P.	Ac-A	Ac-B	
I-a 地盤改良土層	△	△							排水上 △測量
I-b 口付地盤改良土層	×	△							
II-a 黄土土層	△	○							自燃層
II-b 地盤改良土層	×	×							
Ⅲ 地盤改良土層	△	△							上部Dn 上部Dn V.P.測量
IV 地盤改良土層	○	○	●	●	●	●	●	●	
V 地盤改良土層	△	○	●	●	●	●	●	●	
VI 地盤改良土層	○	○	●	●	●	●	●	●	

第1図 調査位置と確認調査



第2図 調査区位置図

III 遺跡の地理的・歴史的環境

1 地理的環境

安中市は関東平野の周縁部である群馬県西部（西毛地域）に位置する。市の西部から北部にかけては山地が広がる。碓氷峠付近を水源とする碓氷川が西から東へ流れ、市域を南北に分断する。また、碓氷川の北側には並行して九十九川が流れ、安中市東部で碓氷川に合流する。これらの河川流域には、河岸段丘が発達し、下位段丘（礫部、人見地区）、中位段丘（安中・原市地区）、上位段丘（横野地区）に区分される。

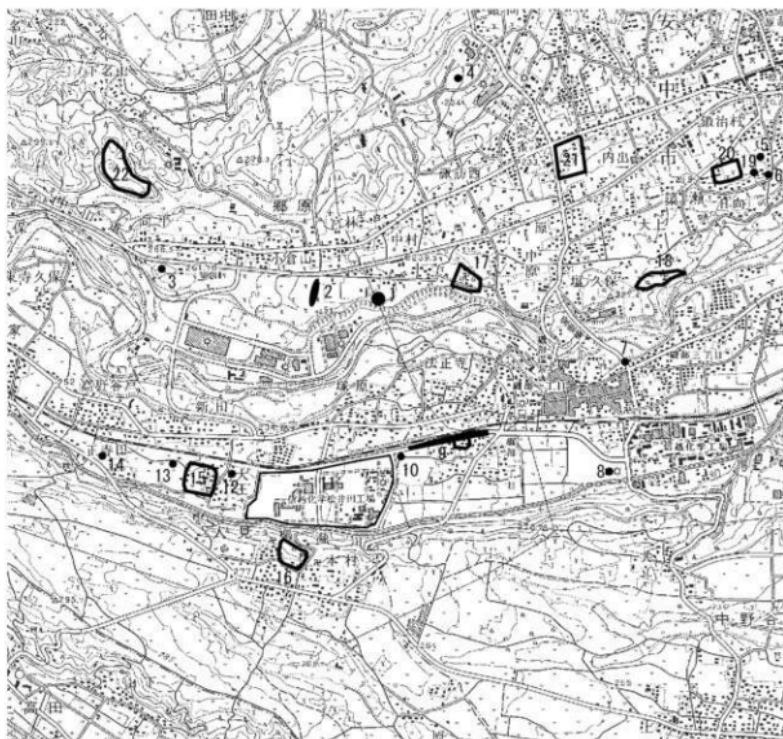
中村遺跡は安中市郷原字中村地内に所在する。本遺跡が存在する郷原地区は、碓氷川と九十九川に挟まれた中位段丘面に存在する。本遺跡のすぐ南側は、急峻な崖となり、北側は東西に延びる丘陵となっている。また、国道18号付近の平坦地では、試掘調査等により黒色土が厚く堆積する埋没谷が確認されている。本遺跡の標高は、約243mである。

2 歴史的環境

郷原地区には、細文時代前・中期、奈良・平安時代の遺物散布地（市No314等）が広範囲に認められるが、発掘調査された遺跡は少ないため、遺跡の状況は不明な点が多い。地区的西側には、円墳を主体とする郷原古墳群が存在し、現在でも数基が現存する。昭和45年に調査された郷原4号墳（円墳）が、平成18年に再発掘された（千田2007）。また、平成19年には、農道建設に伴い堀端遺跡が調査され、細文時代中期の配石遺構、「石」と墨書きされた土器が出土した住居址を含む平安時代の集落跡が確認された。なお、中村遺跡については、平成16年に民間開発に伴い確認調査を実施し、中世の井戸を検出した。中村遺跡の北にある自性寺には、宝篋印塔2基があり、東には菅沼城（海雲寺境内）が存在する。また、郷原地区を通る現在の国道18号沿いは、古代東山道の推定ルートとされ、近世には中山道として機能し、現在に至る。

3 層序

中村遺跡の土層堆積は、浅間A軽石（As-A）を大量に含むI a層（黒褐色）の下に浅間B軽石（As-B）を含むII a層（黒色）及び純層であるII b層（灰褐色）、弥生時代から古代にかけての遺物包含層であるIII層（黒色）、細文時代の遺物包含層であるIV層（暗褐色）、硬質のローム層であるV層（暗黄褐色）、浅間板鼻黄色軽石（As-YP）の純層の順で堆積がみられた。土層の堆積は厚く、遺構確認面までは約80cmである。



- 1 中村道路（本報告）
 2 磯雄遺跡（純文・古代集落）
 3 原市4号墳（後期円墳）
 4 銀治ヶ嶺遺跡（純文・古代集落）
 5 萩瀬二子塚古墳（後期前方後円墳）
 6 八幡平Ⅱ遺跡（純文中後期集落）
 7 塩久保遺跡（中期円墳）
 8 田中田・久保田道路（前期方形圓溝遺構）
 9 西裏・西新井遺跡、御訪辺遺跡（純文・古墳・古代集落、中世館址）
 10 西裏遺跡・人見北原遺跡（純文・古墳・古代集落）
 11 松井田工業団地遺跡（純文・弥生～古代集落）
 12 人見大王寺遺跡（古代集落）
 13 人見中の条遺跡（古代集落）
 14 人見正寺田遺跡（古代集落）
 15 大王寺城（中世）
 16 人見城（中世）
 17 菅沼城（中世）
 18 清山城（中世）
 19 萩瀬首塚（古墳・中世）
 20 八幡平陣城（中世）
 21 原市内出雲（中世）
 22 名山城（中世）



第3図 周辺遺跡分布図

IV 遺構と遺物

1 繩文時代の遺構と遺物

(1) 遺構

調査区全域でIV層から縄文時代前期前半から後期前半にかけての遺物包含層と土坑3基を確認した。また、小礫が多数検出されたが、集石及び配石遺構は確認されなかった。

土坑（第4図）

D-1号土坑 M-1号溝の掘削により壊され、壁面で検出された。確認面はIV層下部である。平面円形と推定され、底面で土器の底部が出土した。土器の内側には小礫が入っていた。遺構の時期は前期末である。

D-2号土坑 確認面はIV層下部である。平面円形である。土坑上部で土器片が集中して出土した。遺構の時期は、前期前半である。

D-3号土坑 確認面はIV層上部である。M-1号溝に壊されていたが、土坑中央で土器がまとまって出土した。遺構の時期は中期後半である。

(2) 遺物

縄文時代前期前半から後期前半の土器及び石器が出土した。土器の主体は、前期前半（関山式期、有尾・黒浜式期）及び中期後半（加曾利E3式期）である。完形品は出土せず、全て破片であった。個体別分類及び接合状況から判断して、同一個体個体は少ないことから、廃棄された遺物としてとらえられる。石器は、C類を主体としており、石鏸、打製石斧といった主要器種が少数出土したのみで、他の器種は少ない。また、調査区全域で大量的使用痕の無い礫が出土した。分布にはまとまりが認められなかつたが、大きさは小さく何らかのまとまりがあったことを伺わせる。

縄文土器（第6・7図）

縄文土器は土器型式により5群に分けた。

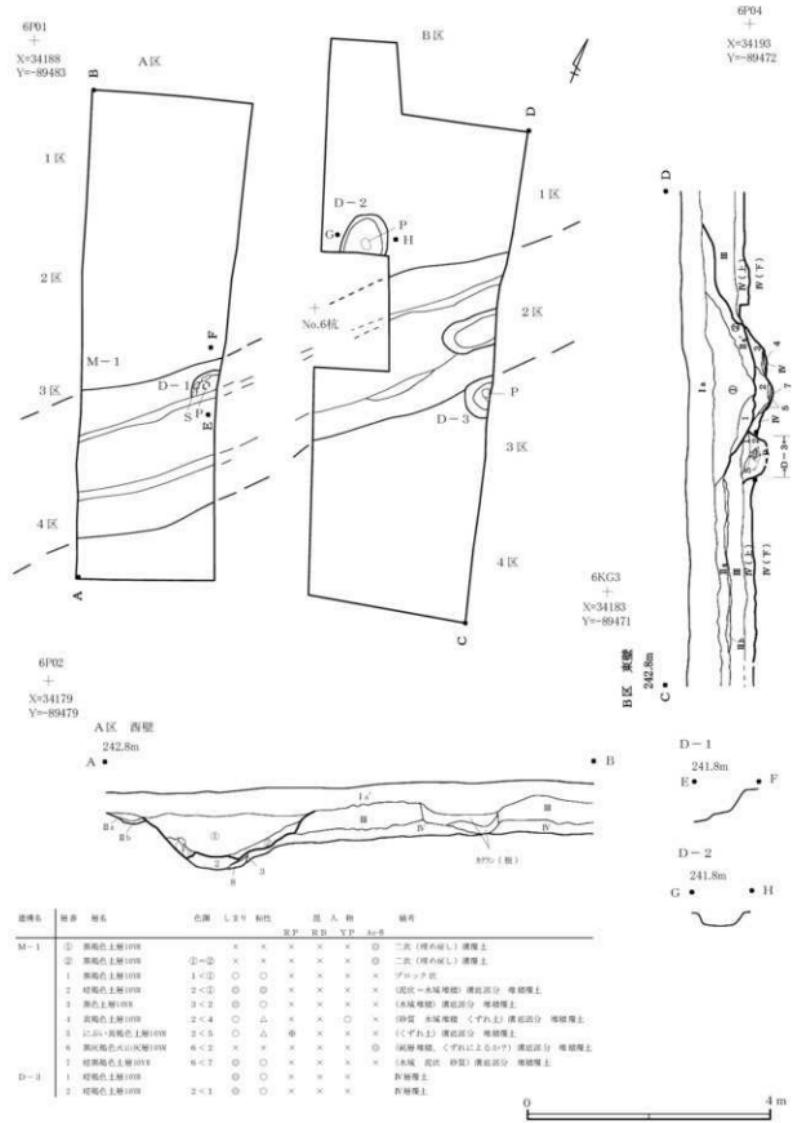
I群（1～11） 前期前半の土器（関山II式期、有尾・黒浜式期）である。土器の胎土に纖維を含む土器である。

II群（12～26） 前期後半の土器（諸磯式期）である。12と13は、沈線による波状文を主体とする諸磯a式期、14～16は、半哉竹管による爪形文を主体とす諸磯b式古段階、17～25は刻み目をもつ浮線文及び平行沈線文をもつ諸磯b式中段階である。26は底面に木葉痕のある前期終末の土器である。

III群（27～29） 中期前半の土器（勝坂・阿玉台式期）である。27と28は阿玉台式期である。29は「焼町土器」に類似する。

IV群（30～37） 中期後半の土器（加曾利E式期）である。30～34はE3式期である。35～37はE4式期である。

V群（38） 後期前半の土器（称名寺式期）である。



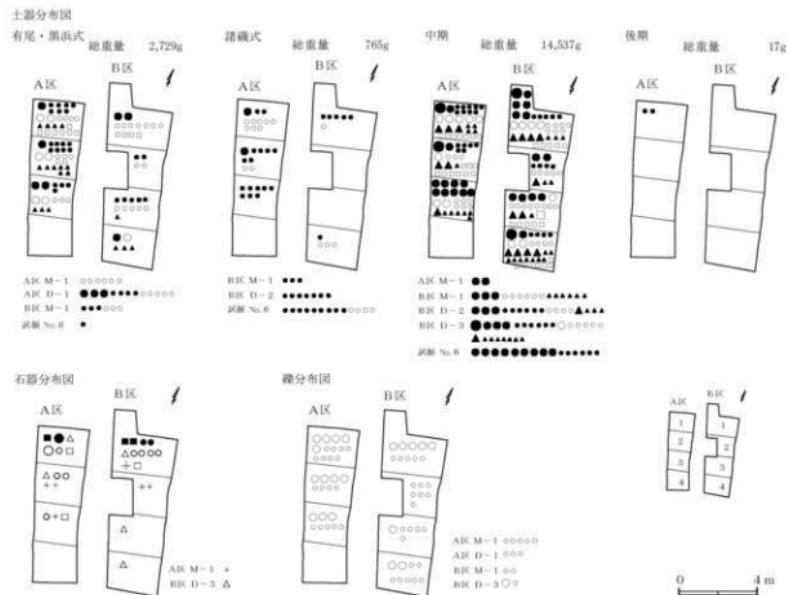
第4図 中村遺跡 全体図

石器（第7図）

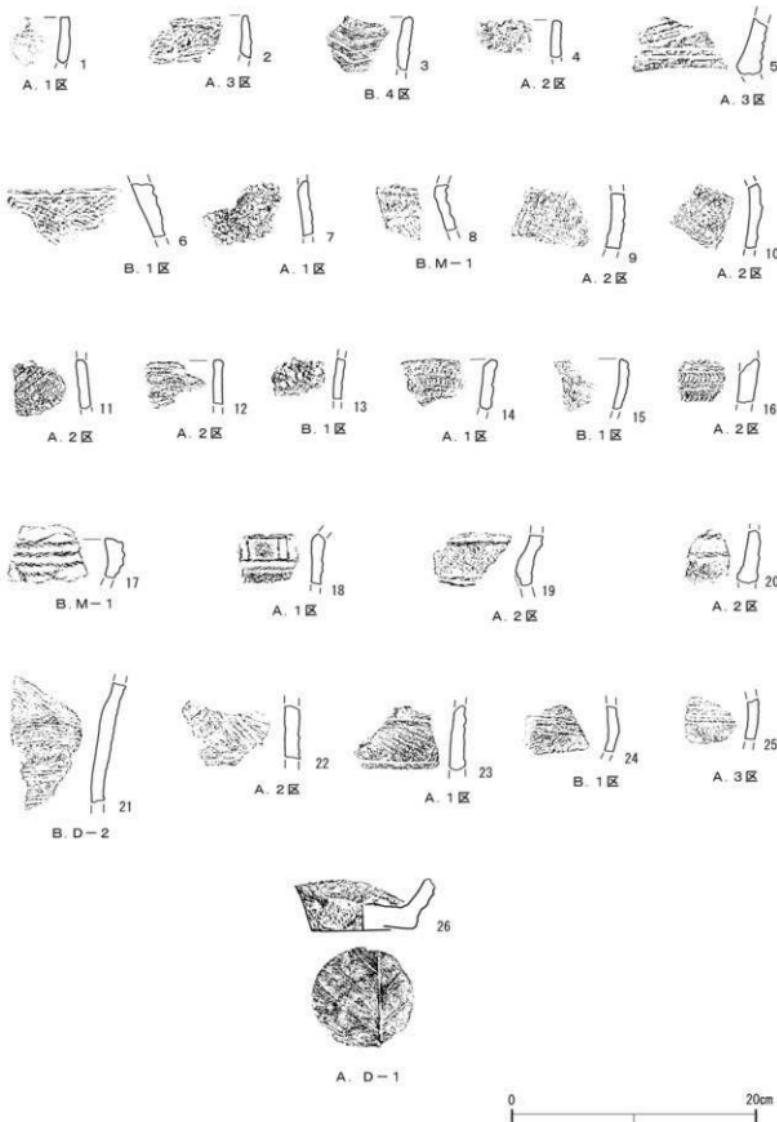
本調査区出土の石器は、第1表のとおりである。石器は、C類（凹石、磨石等）が主体を占め、A・B類含めて剥片石器が極端に少ないので特徴であり、組成の偏りが認められた。また、C類の素材となる砾も多数出土していることから、両遺物の関連性が考えられる。

石器組成		石器組成				
		A区	B区	C区	計	重量(g)
A類	石斧類	上部	2	2	2	6
		下部	1	1	1	3
	刮削器	D区	0	2	2	4
B類	石器類	D区	1	1	1	3
		上部	1	1	1	3
	石器類	D区	1	2	3	6
C類	刮削器	D区	9	4	13	103
		上部	3	4	7	60
	磨石	1	1	1	3	3
C区類		上部	25	1	26	3
總數合計			23	19	1	43

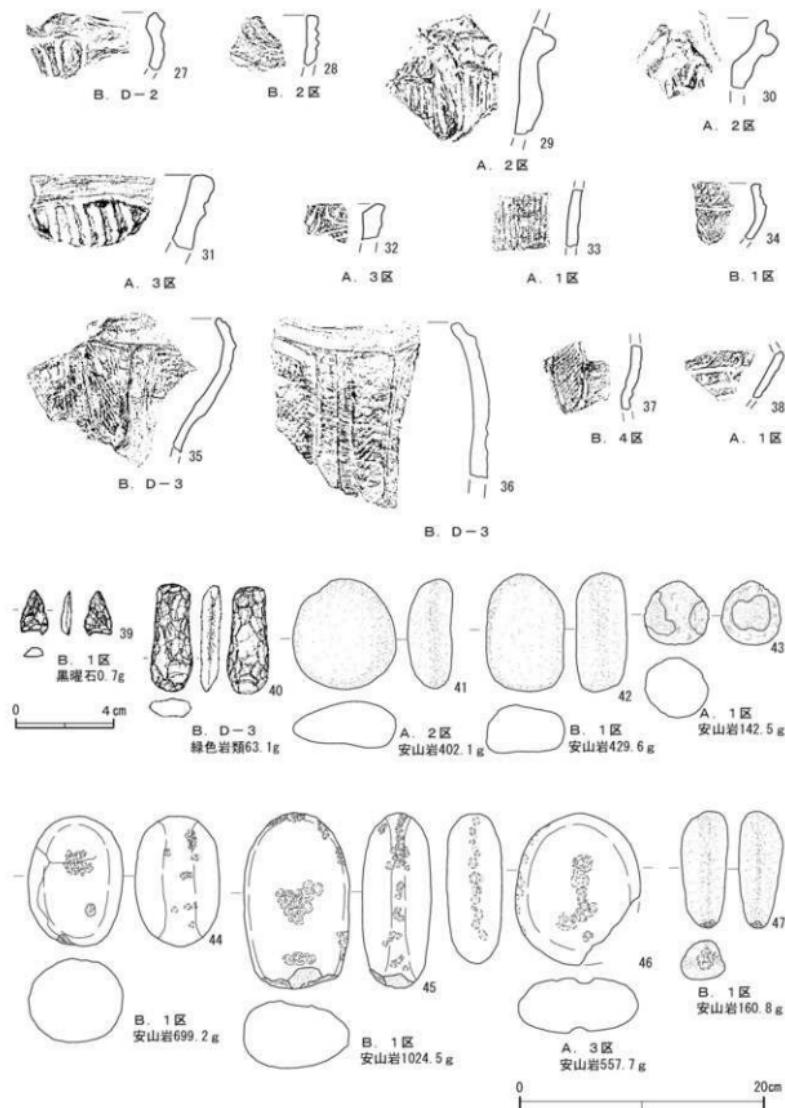
第1表 石器組成表



第5図 遺物分布図



第6図 縄文遺物実測図（1）



第7図 繩文遺物実測図（2）

2 中世の遺構

溝

調査区を東西方向に走る溝1基を約8m調査した。幅2.8m、深さ0.8mで、断面逆台形を呈する箱堀である。II b層から掘り込まれ、底部にはローム混じりの黒色土の埋め戻し痕が確認でき、さらにその上部を浅間B軽石を含むII b層が再び堆積していた。底面には鉄分が沈着した水成堆積による硬化面が観察された。また、灰褐色の軽石層が薄く堆積していた。この軽石は堆積状況の比較により浅間B軽石以外のものと推定される。溝が埋没した後に、浅間A軽石を含む土層が水平堆積していた。溝の内外では、盛り土（土居）は確認できなかった。溝からは、須恵器破片が1点（平安時代）、大形碟が数点出土したのみであり、時期を判断できる遺物は出土しなかった。大形碟は覆土中であり、廃棄された状態で出土した。確認面及び覆土の状況から、12世紀以降でも新しい中世の所産と推定される。

検出された溝は、方向がN-40°-Eである。溝の西約10mは崖となり、東では、溝に平行する地割りが確認でき道路が存在する。溝はこの地割りに沿って伸びているものと推定される。

V 成果と問題点

1 繩文時代について

調査区が狭く範囲も限定されていたが、崖端といった地形の制約のある場所で、土坑3基と大量の遺物が出土した前期から後期にかけての遺物包含層を検出した。これにより、付近には集落が存在し、本調査区が集落の廐棄場所であった可能性が明らかとなった。

出土遺物では、底面に木葉痕が明確に残る前期末の土器が出土した。調査区全域から多数出土した小碟は、意図的に撒入されたものであるため、集石群等が存在した可能性が考えられる。しかし、碟には被熱等はないため、現段階では性格は不明である。C類を主体とする石器群と碟の存在により、食物加工を中心とする生業活動が営まれた場所であったことが推測できる。

本遺跡と同時期に調査された中期後半以降の配石遺構が発見された堀端遺跡の調査によって、從来知られていなかった郷原地区における縄文時代の遺跡群の内容の一端が明らかになるものと思われる。

2 中世について

本調査区では、中世の所産と考えられる溝が検出された。この溝は、調査段階では、予測されていなかった。しかし、地形図では、現在の地割りに沿って伸びていることが判明した。中村遺跡の東には菅沼城が存在することから、検出された溝との関連性が指摘できる。菅沼城については、記録、伝承が少ないため詳細は不明だが、碓氷川左岸の崖端に築城された崖端城で、文禄年間（1592～1596年）に菅沼定清の築城とされる。現在の海雲寺にあり、繩張りは主郭を囲むように二重の堀と土居が構築され、東にはクランク状に折れる戸口が現存する。この戸口から西にはほぼ直線となる地割り（道）が認められ、周辺には「給人宿」の地名が残る。中村遺跡の溝はこの直線状に伸びる地割りに対して斜め方向に

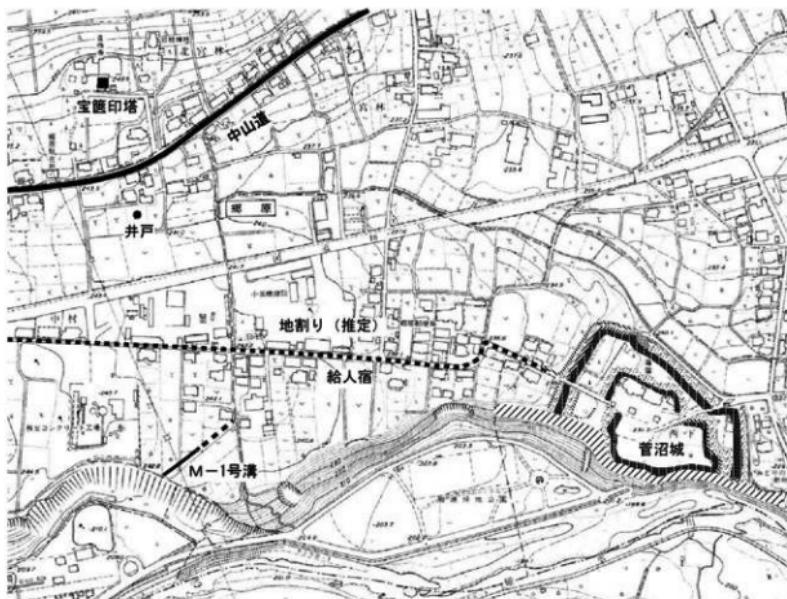
走っているが、この溝は、菅沼城に関連する遺構と推定され、城域の範囲がさらに西へと伸びることが調査によって明らかとなった。

中村遺跡周辺における中世遺跡は、城では、碓氷川左岸には名山城（山城）、滝山城（崖端城）、旧中山道に接して内出砦（方形館）がある。また、遺物では、旧中山道に面する自性寺に宝鏡印塔2基が存在する。旧中山道は中世にまで遡る可能性もあることから、この周辺にある城館は、街道（交通）の要衝を押さえるために築城されたものと考えられる。郷原地区の中世が歴史に果たした役割を知る上で、中村遺跡の調査は、新たな資料の一つとなり重要な発見となった。

参考文献

井上慎也 2001 「中世」『安中市史』第4巻 資料編1 原始古代中世編 安中市

千田茂雄 2007 『原市4号墳発掘調査報告書』安中市埋蔵文化財発掘調査団



第8図 菅沼城と中世関連遺構群

写 真 図 版



中村遺跡 全景



D-1号 土坑



D-2号 土坑



D-3号 土坑



作業風景

図版2



M-1号溝西 土層断面



M-1号溝東 土層断面



発掘調査報告書 抄録

ふりがな	なかむらいせき
書名	中村遺跡
副書名	鉄塔建替工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ番号	
編著者名	井上慎也
編集機関	安中市埋蔵文化財発掘調査団
編集機関所在地	379-0292 群馬県安中市松井田町新堀245 (安中市教育委員会内) TEL 027-382-1111
発行年	西暦2008年(平成20年)3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	道路番号					
中村遺跡	安中市鄭原字中 村	102113	C-23	36°18'04"	138°50'24"	20070926 ~ 20071004	81m ²	鉄塔建替

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中村遺跡	集落	縄文前・中・後期 中世	土坑3 溝1	深鉢、石器	縄文時代の遺物包含層と 菅沼城と同時期の溝を検出。

中村遺跡

—鉄塔建替工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行日 平成20年3月31日
 編集・発行 安中市埋蔵文化財発掘調査団
 群馬県安中市松井田町新堀245
 (安中市教育委員会内)
 印刷 朝日印刷工業株式会社
 群馬県前橋市元総社町67